

課題

○小学校から中学校に進むに従い、読書離れが顕著になっており、小学生期の読書習慣の定着が課題

○本県は図書館設置率が全国平均より低く、読書環境の面において子供が読書活動を行う上での課題

事業のねらい

- (1) 黙食を行う小学校の給食時間における朗読放送と関連図書の設置を実施することで読書習慣の形成を試み、効果の測定を行う。
- (2) 学童保育所や困難を抱える子供へのコミュニケーションを通じて小学校低学年及び中学年における読書習慣の形成を試み、効果の測定を行う。
- (3) 上記の取組に対し県がボランティアの養成や図書貸出の支援を行うことで、人材や、蔵書量に課題を抱える自治体でも取組が導入可能か検証

実施内容

①かつらぎ町立笠田小学校での取組 (かつらぎ町へ再委託)



【取組内容】
かつらぎ町立笠田小学校全生徒
(約250名)

【取組内容】
ボランティアが作成した朗読録音CDを、黙食を行っている小学校の給食時間に流し、児童の読書への興味を誘った。また、同時に朗読図書を含む関連図書を学校へ貸出しを行い、読書につなげる。



②学童保育所や困難を抱える子供への取組 (那智勝浦町へ再委託)

【対象】
那智勝浦町内の学童保育所4か所
(小学校1～3年生約40名)
困難を抱える子供(不登校)で青少年センターの学習指導に通う生徒、児童4名

【取組内容】
興味関心を聞き取りながら、書籍・電子書籍の紹介などを行いながら、読書を促した。

②ボランティア養成及び図書貸出の支援 (和歌山県が実施)



上記、笠田小学校の朗読ボランティアの養成講座を実施。また不足する図書についても県立図書館から貸出を行った。

成果・課題

【成果】
(笠田小学校での取組)
アンケートでは大きな変化は見られなかったが、実施日の図書室利用が盛況であったことから、読書意欲の向上に一定の効果は確認できた。

【アンケートの結果】

1カ月の平均読書冊数	実施前	実施後
全体	5.2冊	5.2冊
2年生	5.9冊	5.9冊
3年生	5.1冊	5.0冊
4年生	5.4冊	5.8冊
5年生	5.0冊	5.2冊
6年生	4.2冊	3.7冊

(学童保育所での取組)
大人と一緒に本を勧めあう時間を持つことにより、子供どうしで本を勧めあうようになった。

- 【課題】
- (笠田小学校での取組)
- 全校一斉放送のため、1年生～6年生が同じ作品の朗読を聞くことになり、学年に応じて作品を取り上げることができなかった。
 - 長期的な取組にするためにはさらにボランティアの養成が必要。
 - 複数校で実施するためには、学校へ貸出を行うための図書の確保が必要であり、県立図書館からの図書の支援がさらに必要である。

(学童保育所での取組)
電子書籍は興味関心の対象となるが、低学年が使いこなすには大人の補助が必要である。

課題

学校段階が進むにつれて、子どもの読書離れが進んでいる現状がある。また、コロナ禍で「緊急事態宣言」及び「自粛要請」の中、体験的に読書に親しむような機会が少ない。

事業のねらい

コロナ禍での対面とオンラインのハイブリット的な読書活動の取組を県内全域に広め、子どもが主体的に読書活動に取り組み、生涯にわたる望ましい読書習慣の形成を目指す。また、発達段階に応じた研修の充実を図り、乳幼児期から高校期に至る切れ目のない読書活動を推進する。

企画運営員会

- 第1回6月23日
- 第2回2月（書面開催）
- 新しい生活様式を踏まえた読書活動の在り方や効果的な実施方法等の検討
- 令和3年度事業計画の内容検討及び助言
- 子どもの発達段階に応じた読書活動の取組への助言及び先進的な取組の紹介
- 事業の成果についての検証、分析



オンラインによる読み聞かせとワークショップ

講師 会津大学短期大学部幼児教育学科講師 渡部琢也 氏
会津大学短期大学部学生

対象 ① 平田村立ひらたこども園 (5歳児)
② 塙町立塙小学校 (2年生)
会津若松市立河東学園前期課程 (2年生)

日時 ① 令和3年9月10日(金) 10:00~10:30
② 令和4年9月17日(金) 10:00~10:45

コロナ禍の中、「新しい生活様式」などを踏まえ、こども園ではZoomを活用したオンラインによる指遊びの実演と読み聞かせ、小学校ではZoomを活用した読み聞かせの実演と複数校の児童による読書についてのワークショップを実施した。

Zoomを活用したオンラインによる指遊びの実演と読み聞かせ



ひらたこども園

- ①「これからじまるよ」手遊び
- ②「やきいもやきいも」手遊び
- ③「いもいもほりほり」読み聞かせ
- ④「おべんとうぼこ」手遊び
- ⑤「おべんとうしろくま」読み聞かせ

Zoomを活用したオンラインによる読み聞かせと複数校の児童による学び合い



塙小学校

- ①「どうぶつたいじゅうそくてい」読み聞かせ
- ②「すみっこのおぼけ」読み聞かせ
- ③ワークシートを活用した交流(学び合い)



河東学園



会津短大

参加者の声

- 手遊びおもしろかったです。くまの絵本がおもしろかった。(園児)
- オンラインでも絵がはっきり見え、声もはっきり聞こえて楽しかった。(小学生)
- オンライン読み聞かせを通して、もっと本を読みたくなった。(小学生)
- 画面全体に絵本が映し出され、大型絵本を見ているかのような感覚で笑ったり、お話ししたりしながら絵本の世界を楽しんでいた。(こども園教員)
- オンラインとはいえ、本の中身がよく見え、子どもたちは集中して聞き入っていた。(小学校教員)
- 感染防止をした状態でも容易に交流ができ、意見交換等をして刺激を受ける事ができるオンラインでの形態は、今後実用性がさらに高まってくると感じた。(講師:大学生)

「世界と未来を変える読書」～新しい生活様式と読書～

日時: 令和3年12月19日(日) 10:00~15:50
場所: とうほう・みんなの文化センター

乳幼児期 講義・演習: 「新しい生活様式と家読・読み聞かせについて」
講師: 平田村立ひらたこども園保育教諭 桑原 真希 氏

小学校期 講義・演習: 「新しい生活様式とブックトークについて」
講師: 本宮市立しらさわ夢図書館副館長兼専門司書 柳沼 志津子 氏

中高校期 講義・演習: 「新しい生活様式とビブリオバトルについて」
講師: 福島県立小野高等学校教諭 古川 真 氏
元小野町地域おこし協力隊 宍戸佳織里 氏

パネルディスカッション 「新しい生活様式とこれからの読書」
コーディネーター 高野 保夫 福島大学名誉教授
パネリスト 鈴木 史穂 福島県立図書館専門司書
桑原 真希 平田村立ひらたこども園保育教諭
宍戸佳織里 元小野町地域おこし協力隊



成果

- コロナ禍もオンラインで読み聞かせができることを実証できた。
- Zoomを活用したオンラインによる読み聞かせという、新たな取組に子どもたちの読書意欲が高まった。
- 乳幼児期から中・高校期末までの各発達段階に応じた講義・演習を通して、読書の魅力を再発見することができた。

課題

- 不登校児童生徒の人数は年々増加しており、そういった子どもは学校図書館の利用が難しく、学校に通っている子どもと比べ、本に触れる機会が十分でないことが想定される。
- 矯正施設や児童自立支援施設にいる子どもは、施設では本を読むことができる環境にあるが、施設に入る前に、本を読んだり、読んでもらう経験が少ない傾向にあり、施設を出てからも本を読む割合が減っていることが想定される。

事業のねらい

- 不登校等の理由により学校に通っていない子どもの現状の把握及び読書環境を整備する。
- 矯正施設や児童自立支援施設等の子どもが施設を出てからも読書活動を習慣化できるよう、読書に興味関心を持つきっかけづくりを行う。

実施内容

① フリースクールへの図書セットの貸出



- ・府内フリースクール4団体に対し、図書セットの貸出を実施
- ・子どもが図書セットの本を読んで感じたことなどをPOPに表現し、次の団体へ貸出

② オーサービジットの実施



- ・事業実施前後に、作家の本を当該施設団体へ配架
- ・児童自立支援施設、矯正施設、フリースクールへ作家が訪問し、絵本の読み聞かせや質疑応答を実施

③ 子ども向け図書館案内リーフレットの作成



- ・企画運営委員の意見等を踏まえ、子ども向け図書館案内リーフレットを作成
- ・矯正施設、児童自立支援施設、フリースクールへ配布

④ 事業報告会の開催

- ・様々な子どもの居場所の職員等に対し、①～③の事業報告及び①、②の実践報告をインターネット配信で開催

成果

- ① 学校に通っていない子どもの読書環境の整備
 - 1日あたり30分以上読書をしている子どもの割合

図書セット貸出前	図書セット貸出後
43%	53%

- ② 子どもが読書に興味を持つきっかけづくり
 - 読書をする理由で「時間つぶしになる」と回答した子どもの**81%**、「他にすることがない」と回答した子どもの**75%**が事業実施後、読書をする理由に**変化があった**と回答

- ③ 子どもに対し、公立図書館等の情報提供
 - 子どもが本を楽しみたい時や、必要な知識を得たい時など、様々な状況で図書館を利用することができるリーフレットの作成。

④ 様々な居場所における子ども読書活動の充実

- 事業報告会 アンケート結果 「報告会で得た情報を今後に生かすことができると思うか。」

	とても そう思う	まあまあ そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
割合	25%	75%	0%	0%

課題

第四次「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」で挙げられている計画改正のポイント「①発達段階に応じた取組により、読書習慣を形成すること②友人同士で行う活動等を通じ、読書への関心を高めること③情報環境の変化が子供の読書環境に与える影響に関する実態把握・分析」に沿ってこれまでの取組を継続・発展させる。

事業のねらい

これまでの取組を継続・発展させて「新しい生活様式」を踏まえた新たな読書活動を構築する。子供が生涯にわたる読書習慣を身に付け、読書の幅を広げるため、読書の機会の拡充や読書経験の共有により、様々な図書に触れる機会を確保し、不読率0%を目指す。

- 1 ICT機器の双方向機能を取り入れた新刊本紹介やブックトークなど学校全体で読書量を増やす読書活動を行う。
- 2 ICT機器の双方向機能を取り入れた同学年や異学年交流による読み合いや読み聞かせ、ビブリオバトル等、子供が相互に図書を紹介し合う活動を行う。
- 3 生活科・総合的な学習の時間において探究のプロセスに、読書活動とICT機器や情報通信ネットワークを組み合わせ、**「主体的・対話的で深い学び」**の視点からの授業改善を図るとともに、児童の主体的、意欲的な学習活動や読書活動を行う。
- 4 本や辞書を読んだり、情報通信ネットワークを活用して調べたりして、考えたことやわかったことをまとめる、自学ノートに取り組む。

実施内容

- (1) 自立的な読み手を育てる読書環境の整備
 - ①朝の読書タイムと読み聞かせセンセイ、ブックトークタイム
 - ②読書カードと読書貯金の取組
 - ③児童の自治活動による読書啓発
- (2) 読書活動の充実
 - ①図書館テキストの活用
 - ②自学ノートの取組
 - ③並行読書等を取り入れた国語科の授業改善
 - ④読書活動と情報通信ネットワーク等を活用した探究的な学習



(1) 読書環境の整備：校内7つの図書コーナー



コミュニティ・スクールの特性を生かして、図書ボランティアによる環境整備を継続していった。児童の学びたい気持ちや知的好奇心にこたえる時間や空間を創り出している。



図書ボランティア作成の分類キャラクター「本の妖精」背表紙にもオリジナル分類シールが貼ってある。

(2) 読書量を増やす取組：ブックフェス（図書祭り）



図書委員会と読書活動委員会2つの委員会がコラボして企画した「ブックフェス」では、「デジタルポップ展」「本の総選挙」「府小っ子本の総選挙」「古典ウィーク『古典本展』」「続・新刊本展」「読書の木」Google Workspace「Meet」を使用した「府小っ子ビブリオバトル大会」を行った。

(3) 読書活動の充実：国語科・生活科・総合的な学習の時間を中心とした授業改善



読書から自分の考えや生き方を広げ、「自己の生き方」へとつなげていった総合単元「偉人から学ぼう」など、一人一台端末を活用して、全員参加型の授業を目指すとともに、児童の主体的な学習活動や読書活動を行った。

成果

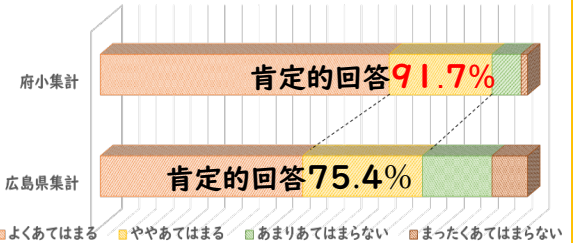
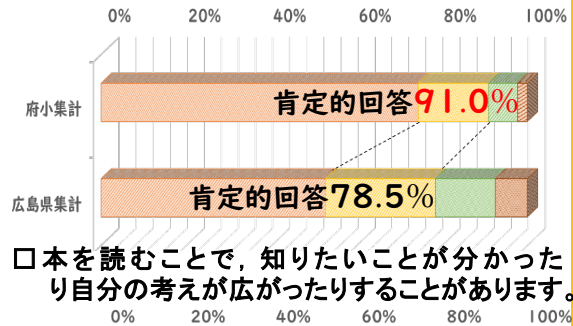
○令和4年2月 不読率0%

○月3冊以上読書する児童の割合

事業実施前	59.6%
事業実施後	99.9%



○令和3年度 児童生徒学習意識調査
□本を読むのが好きです。



- 一人1台端末の利点を生かし、電子書籍を取り入れ活用したり、OPACを用いて町立図書館の図書の予約・受取を学校でできるようにした。
- 読書活動パンフレットを作成し、取組を広く発信した。

